

者さんは大病院だから受診しているのだ、自分個人に受診しているのではないのだと思うようにしていました。なぜなら開業しても、その患者さんが全て自分のクリニックに来院するわけではない、という話を何度も聞かされていたからです。「患者さんは病院についているのだ、勘違いするな」と自分に言い聞かせていました。

そう思っていたのですが、開業してからも済生会平塚病院から何人もの患者さんが来院して下さいました。新しいクリニックは以前の病院から電車で1時間以上も離れており、通院は難しいだろうと思っていたのですが、顔見知りの患者さんが突然ひょいと現れて、

「やっと見つけたよ先生の病院」

などと言われますと、熱いものがぐっと胸にこみ上げてきました。

現在では、毎日の外来で、自分のできることを患者さんと向き合って診療しています。思うに、この3年間、僕は開業医になろうとして必死だったと思います。と同時に、自分自身の生活や環境を見つめ

直すための、よい期間でもあったように思います。失ったものはあるにせよ、開業して得たものは「医師個人としてのやりがいとプライド」ではないかと思うのです。

幸いにもスタッフにも恵まれました。開院初年度からずっと変わらないメンバーがクリニックを引っ張ってくれます。新しく入ったメンバーも元気でやる気のある人ばかりです。この春には周囲の皆様にご助けられて、横浜市より最短で法人許可をいただきました。スタッフとともに「医療法人 健希会 あいはらクリニック皮フ科形成外科」として、新しい気持ちで再出発をしたいと考えている次第です。健希会とは、「健やかになることを願っているクリニック」という意味でつけました。

この場を借りまして、いつもご指導していただいている諸先輩方、紹介患者を送っていただいている近隣の先生方、いつも励ましてくれるスタッフの皆様、そしていつも見守ってくれる僕の家族にも、心からの感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくお願い申し上げます。



日本鋼管病院（川崎市川崎区）

石橋正史

日本鋼管病院は、昭和12年に川崎市初の総合病院として、日本鋼管の企業立病院として創立されました。昭和43年に、皮膚泌尿器科が皮膚科と泌尿器科に分離されました。昭和53年に現在の病棟が発足しました。日本鋼管と川崎製鉄が経営統合された平成15年に、医療法人社団こうかん会が発足、独立法人化して普通の民間病院へと移行しました。同年に、日本鋼管病院の外来診療部門としてこうかんクリニックが新たに開設されました。日本鋼管病院とは隣接していますが、別敷地になっています。現在もJFEスチール株式会社出資の関連法人とされています。ちなみに、「J」は日本（Japan）、「F」は鉄鋼（鉄の元素記号Fe）、「E」はエンジニアリング（Engineering）を意味し、「日本を代表する未来志向の企業グループ」（Japan Future Enterprise）であることを表すとのことです。しかし、病院の住所の町名は「鋼管通」であり、川崎駅からのバスの行き先表示で「鋼管循環」と出ているように、「鋼管」という名称は地域に根ざしたものであるように思われます。病院の2階以上の病室からは、JFEスチールの赤と白の市松模様のタンクや、製油所の煙突から噴出する煙、精製の過程で出来る余剰なガスを燃焼させるときにみられるフレアスタックと呼ばれる炎が吹き出す様子が時折みられます。

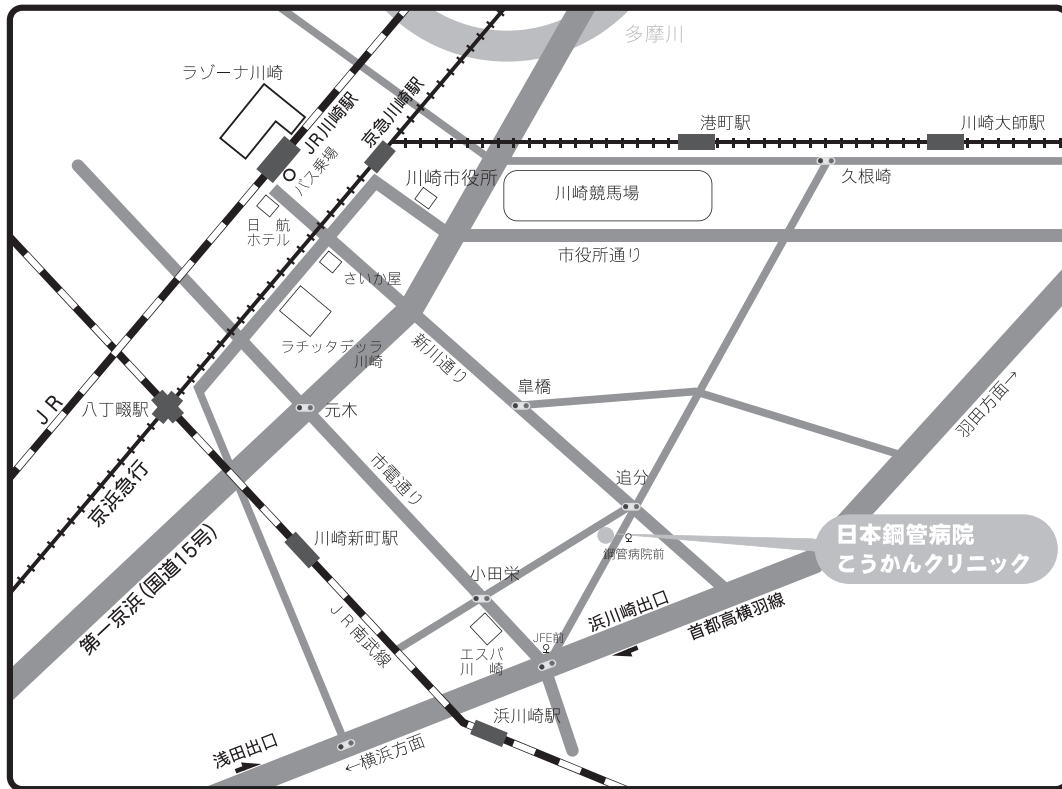
日本鋼管病院がある川崎区は、川崎市の最も東側である多摩川の下流から河口にかけての南側に位置し、北は多摩川と東京都大田区、南は神奈川県横浜市鶴見区に隣接しています。JR川崎駅および京急川崎駅を起点に東京湾に広がった地形をしています。多摩川沿いや臨海地区は大規模工場地帯で、JFEスチールの製鉄所や石油化学、機械・電機等大規模工場と港湾物流の倉庫等が多数集積しています。川崎区では、工場跡地等の土地利用転換に伴い



外来スタッフ一同

大規模なマンションなどが次々と建設され、近隣には大型ショッピングセンターなどもあり、若い世代が増加傾向にあります。当院は、臨海地区の企業用地を除くと、川崎区のおよそ中心に位置しており、JR川崎駅からバスで約8分です。駅周辺の市街地から少し離れていて、病院の周辺は、比較的閑静な古くからの住宅地です。長年通われている患者さんも多いです。病院の前は公園で、視界が開けていて、開放感があります。

平成23年3月現在、こうかんクリニックでの診療科目は、内科・外科・整形外科・産婦人科・小児科・耳鼻咽喉科・皮膚科・眼科・泌尿器科・精神神経科です。一部の外来（歯科、リハビリテーション科、スポーツ整形外科）は日本鋼管病院で診療されています。日本鋼管病院は395病床（一般病棟347床・療養病棟48床）で、消化器肝臓病センター、糖尿病センター、透析センター、ドック・健診センターという4つの院内センターが配置されています。なお、病院が外来機能を分離して隣接地に診療所を設置する「外来分離」という形態は、亀田総合病院をはじめ、運営効率を高める目的などで、全国的にみ



病院地図

られるようになりました。病院とクリニックの間で診療情報の伝達が行き届かないことがある、病院とクリニックに対する設備面で投資が二重になるなどのデメリットがありますが、患者サービスの向上につながっていることを期待します。

皮膚科は2人体制で、私は平成22年4月に部長に就任いたしました。現在は藤尾由美先生が赴任しております。周囲の開業の先生方からも多くの紹介をいただいております。こうかんクリニックで皮膚科疾患全般の外来診療を行っており、午前中は一般診療で、再診外来は予約を受け付けています。午後は完全予約制で、皮膚生検や小手術、パッチテスト、ケミカルピーリング、陥入爪・巻き爪の矯正、乾癬や白斑などに対する紫外線治療を行っており、局所免疫療法やステロイド剤の局所注射などの脱毛症に

対する治療も行っています。帯状疱疹や蜂窩織炎などの急性期疾患や良性・悪性腫瘍などの手術などの入院診療は、日本鋼管病院で行っています。なお、この文章を執筆している2011年3月現在、クリニックでの外来診療は、原則として通常通りの診療時間となりますが、先日の東日本大震災（東北地方太平洋沖地震）による計画停電の実施によっては、外来診療が短縮、休止になるなどの変更を余儀なくされております。病院の入院診療については通常通り行われています。

今後とも地域の医療に貢献していきたいと思えます。周辺の医療機関、開業の先生方をはじめとする皆様のご支援のほど宜しくお願いいたします。

最後に、この度の震災で被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

【病院の特色】

当院は創設70年の歴史を有しています。鎌倉市大船地区と市境を接する横浜市栄区にある430床の急性期型病院です。JR京浜東北線本郷台駅より徒歩7分程度です。

本郷台駅から病院へ向かって歩いていると、いたち川があり、鯉や鴨が泳いでいて、川の両側には桜並木があり、春には写真を撮りにきているかたも大勢います。病院は、桜の木が多く、富士山がみえる風光明媚な場所にあります。

平成21年より横浜市から地域医療支援病院の承認が得られています。

【現状と今後の展望】

平成21年4月赴任時、常勤医は2人でした。夏場は、皮膚科の宿命と言えるべく外来患者さんの数がとても多く、朝から夕方まで、食事をとる時間もなく外来診療をしていることもしばしばでした。病床数も4床から、赴任後すぐに6床に増えました。多い時は13人程入院する、とても忙しい時期もあります。

平成22年4月より常勤医が1名増員となりました。2人の時は、日々、診療業務に追われることが多かったのですが、少しずつ時間に余裕ができてきて、教育や勉強に力をいれることができるようになってきました。本当に、一つの疾患をじっくり



外来スタッフと（左より、看護師の田中さん、事務の戸沢さん、筆者、河島圭吾先生、岡田里佳先生、宮川まみ先生）

フィードバックして勉強していけるのは、現在の利点であるとおもっています。

栄区は、皮膚科の開業医がとても少ないです。そのせいか、紹介の患者さんもそうでない方も、ときどき気軽に、難しい皮膚腫瘍（メラノーマ、血管肉腫、皮膚リンパ腫、DFS P）を抱えて来院されたり、重症な薬疹患者さんが救急外来で運ばれてくることもあります。

栄共済病院の特徴か、一般病院の特徴かは判りませんが、救急外来に学校でエビチリを食べた後に運動してアナフィラキシーショックになった高校生が救急車で運ばれてきた、というまるで教科書に書かれたような患者さんもきます。そのような重篤な患者さんとはいかなくとも、類似した患者さんは多く救急外来へ来ます。アナフィラキシーの原因を追及し、日常生活を安心しておくれるようにするため、見落としがないようにするのが私たちの使命と考えています。

現状として、皮膚科の病棟は混合病棟で、整形外科、眼科、耳鼻科と共有していますが、当病院は救急に力をいれているせいか、最近では内科、外科、脳神経外科などのほぼ全科が病棟にいることもしばしばです。そのせいか、病棟の看護師さんも重症の患者さんの全身管理に力がはいってしまい、今まで皮膚科に力がはいりにくい状況でした。平成23年2月より、病棟の師長さんが代わられました。10年以上皮膚科を経験されていた力強いかたです。今後は、病棟の看護師さんと勉強会をしたり、患者さんむけの皮膚科のパンフレットを作って、皮膚科のレベルをより高めていきたいとおもっています。

また、外来の看護師さんは、平成22年10月より皮膚科外来に赴任しましたがとても勉強熱心で、私が診察をしている際に、私の話を聞きながら、皮膚科の教科書を読んでいるほどの勉強家の方です。外来看護師さんとは、乳幼児アトピー患者さんとお母様に、アトピー教室をひらいて、生活に密着した指導をしていければと現在相談しています。

晴れた日に、いつものように小田原厚木道路に厚木より入り、覆面パトカーを警戒しつつ下って行くと、右手に富士山が四季折々の雄大な姿を見せてくれます。程なく平塚料金所をくぐると、すぐに大磯町に入ります。平塚料金所を過ぎると、山間から大磯の町と海が顔を覗かせます。大磯のインターを降りると素心学園（ダウン症候群やレックリングハウゼン症候群など、精神遅滞などをもつ方の生活施設）の前を通り、病院に到着します。

当院は東海大学医学部付属病院（伊勢原）の分院であり、リハビリテーションに力を入れ、脳神経外科、神経内科、整形外科などの患者さんが、急性期を乗り切って社会復帰を目指しています。当院も含め、東海大学系列の4病院の医師のほとんどは、当然ですが、東海大学医学部の所属であり、各科伊勢原より出向しています。皮膚科も同様で、現在は医長心得として平成21年度よりの近藤と、山岡（平成23年度より比留間）の2人で担当させていただいています。以前は医局員も少なく、非常勤のみの時期もありましたが、前任の加藤先生が1人医長で2年間頑張ってくれたおかげで、私の年より2人体制を許されました。看護部からも、固定ではありませんが、主に配置される看護師は限定しており、できる限りスムーズに診療が流れるように配慮していただいています。

大磯町は、南は相模湾に面して、国道1号沿いの



左より看護師の山口さん、筆者、山岡先生

平坦部から大磯地塊の丘陵地帯に囲まれた町です。丘陵部が町の65%を占めており、当院は町を一望し、大磯の海を臨む高台に位置しています。夏は大磯ロングビーチの大型スライダーの行列が見え、天気によっては、江ノ島や、運がいいと大島まで見えることがあります。

3月11日の東日本大震災の直後、揺れが落ち着いた後に入院中の患者さんの処置にあがった5階のエレベーターホールから見えた大磯の海が、一部茶色に濁っていたときは、何か恐ろしいものを感じました。津波の被害を知ったのは、渋滞を避けて、ところどころ停電し混乱した町を抜け、なんとか自宅に帰り着いてからでした。被災された皆様には心よりお見舞い申し上げますとともに、亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

さて、大磯町は相模湾を流れる暖流のおかげで比較的温暖な気候に恵まれ、町の皆さんも穏やかです。気候もよいためか、さすがに車椅子の方が多く、年齢90を過ぎても元気な方が多く、100歳を超える患者さんも数名ほど通院されています。実際大磯町は、人口3万3千人弱の約1%は90歳以上の高齢者であり、65歳以上の方が1/4を占めています。皮膚科の外来患者さんもやはり高齢の方が多く、疾患にもやや偏りが見られますが、農家、漁師の方もいらっしゃるし、果樹園や海での接触皮膚炎や創傷、感染症などの患者さんとも対面することがあります。



5階エレベーターホールより

その一方で、高齢者が高齢者の介護をするという現象も生じています。衰弱した高齢者の体位変換を、同じく高齢の方がしっかりとできるはずもなく、気付かないうちに大きな褥瘡ができてしまい、二次感染を生じて発熱し、脱水になってから救急車で搬送されてきた患者さんも何名か経験しています。

当院では、私は褥瘡対策委員会の委員長を兼任しています。WOC看護師の後藤さんや、NST、薬剤部、医事課の方々と褥瘡回診を行っており、前述のような患者さんが入院すれば地域医療連携部の方も交え、方針の相談をします。ご家族の頑張りもあり、自宅に帰ることができた患者さんは、そのまま私の外来で治療を続けたり、通院困難な方は近医や往診の先生方にも協力していただき、治療と指導を行っています。

他の病院などではあまり経験しないことですが、冒頭に名前の挙がった素心学園の患者さん方が、毎週時間帯を決めて数名ずつ受診されます。基本的に中高年の方々なのですが、情動的な癖や行動が通常では生じない状態をつくり上げます。痒いと唾液をつけてこすってしまうため、耳孔がびらんと二次感染で閉塞しそうになった方がいたり、花粉症で鼻を



WOC看護師後藤さんと

こすりすぎて、鼻が削れ、顔中血まみれになった方がいたり、興奮すると机を手で叩くため、手掌全体が厚い腫のようになってしまった方がいたり、驚かされることも多い一方で、精神発達遅滞のため我慢できないことが多いことから、内服薬などの止痒効果ははっきりと表れます。

伊勢原の本院と異なり、地域性に富んだ患者さんを目の前にして、ときに悩み、ときに驚きながらも皆様に信頼していただける皮膚科でありたいと思いつつ、今日も診察室に向かいます。

湘南鎌倉総合病院（鎌倉市）

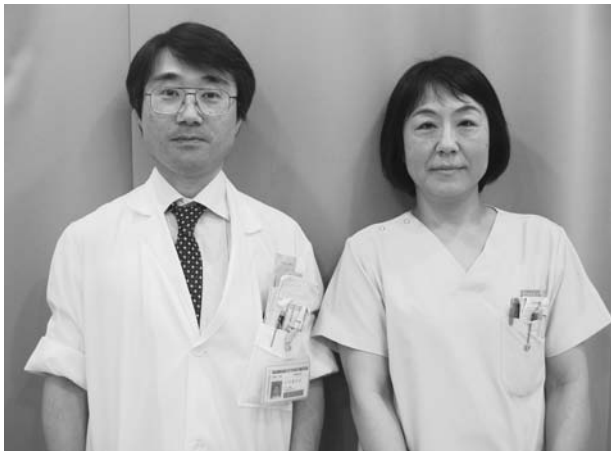
入交純也

当院は1988年11月1日「湘南鎌倉病院」として鎌倉市山崎に開設されました。病院開設時には皮膚科はなく、標榜科に追加されたのは1989年6月29日です。1994年3月1日に「湘南鎌倉総合病院」と改称、1995年12月1日法人化に伴い「医療法人社団 愛心会 湘南鎌倉総合病院」となり、2010年2月1日に法人名が「医療法人 沖縄徳洲会」に変更、2010年9月1日に現在の鎌倉市岡本に新築移転しております。最寄駅はJR大船駅で、山崎の旧病院までは徒歩20分くらいでしたが、岡本に移転し徒歩では30分程度かかります。旧病院は正面の病院部分を取り壊し、裏に残った新棟のみで「湘南かまくらクリニック」として外来診療を行って

り、皮膚科は毎週木曜日と隔週火曜日です。

皮膚科開設当初は日本大学の先生に来て戴きましたが、詳しい記録は残っておりません。その後、順天堂大学、東邦大学大森病院、東京医科歯科大学の3学から交替で非常勤医師に来て戴き、1998年7月より東京医科歯科大学から常勤医師1名が加わり、私は1999年3月から赴任しております。一時、常勤医師2名になりましたが、現在は常勤医師1名と東京医科歯科大学関連の非常勤医師3名で、月曜日から金曜日まで原則2診体制で外来診療を行っております。

東京医科歯科大学からの初代医長は、現在横須賀



外来、永嶋看護師と筆者

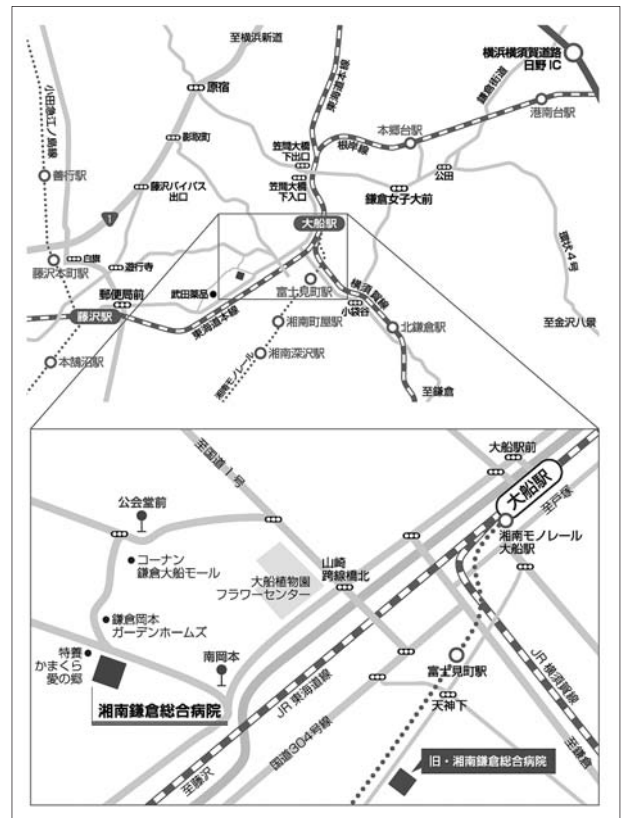
市立市民病院の渡邊憲科長で、非常勤では現横浜市立みなと赤十字病院並木剛部長、現新横浜皮膚科クリニック村山功子院長、他多くの先生に来て戴きました。

新病院の計画は、私が赴任する以前から山崎旧病院裏の駐車場に新築する話などがありましたが実現せず、ようやく2008年8月から岡本の旧神奈川県立大船工業技術高等学校跡地に建設が始まり、約2年間の工期を経て昨年7月末に地下1階、地上15階、病床数542床の新病院が完成しました。

昨年9月1日の移転に先立ち、8月22日に医療関係の方々をお招きして内覧会、29日には開院式と院内見学会が開かれました。特に29日は予想を上回る16,000人以上の方が参加され、駅で長時間並ばなければ病院シャトルバスに乗れない、タクシーに乗っても病院近くの道路は渋滞するなど、参加者や近隣の方々にまで多大な御迷惑をおかけしました。

新病院の本棟は免震構造になっており、3月11日の地震でも揺れはしましたが、大きな被害はありませんでした。但し2、3階の渡り廊下で繋がった別棟は免震構造ではないため本棟と振動の周期が異なり、3階渡り廊下と本棟との繋ぎ目の床板が片側の壁の下に潜り込んでしまいました。

新病院の延べ面積は旧病院の約2.5倍になりましたが、皮膚科外来としての面積はほとんど変わらず、作業通路部分が広まったため、かえって診察室自体は少し狭くなりました。しかし、通路を一部仕切って電子カルテも1台設置し、処置室として、あるい



病院地図

は研修医が予診を取るのにも使えるので、使い勝手はよくなりました。ただ、以前は薬局も医事課も目の前で、電話が繋がらなければ直接行った方が早かったのですが、新病院では遠くなってしまい少々不便です。廊下も広いのですが、これは災害などの際には多くの患者を受け入れられる様にスペースを広くとってあるのだそうです。

また病棟も、6階建て旧病院の5階西病棟にあった皮膚科のベッドは、今度は7階病棟になりました。外来は3階になり、1階から5階に行くのも3階から7階に行くのも、階の差は同じなので、なかなか来ないエレベータを待つよりはと、ほとんど階段を利用していますが、幸いにして天井が低いのか、大学病院などと比べて階段の段数が少なく、さほど苦にはなりません。7階病棟が満床の時には、空床を求め14階病棟に入ることもあるのですが、来るべき計画停電に備えて階段で鍛えております。

建物は大きくなりましても、常勤医師が1名である体制は変わらず、諸先生方の御期待にそえない点多々ございますが、今後とも御指導、御鞭撻のほどをひとえに御願い申し上げます。